

地域風土を生かした 強靱で持続可能な循環型農村経済圏

# スマート・テロワール

食料自給圏「スマート・テロワール」  
開設記念 実業用肥育豚舎  
寄贈：松尾雅彦氏  
平成28年12月8日



(左) 相馬さん、(中) 浦川教授、(右) 浅沼さん

## スマート・テロワールとは？

洗練を意味する「スマート」と、地域独自の風土・景観・品種・栽培法などを表すフランス語の「テロワール」を組み合わせた造語で、カルビー株式会社の元社長 故松尾雅彦氏が著書にて提唱した概念であり、持続可能な食料自給（美しく強靱な農村自給圏）のことを指す。

昨今、米の消費が落ち込む中で、耕作放棄地や転作地を、自給率の低い小麦や大豆、飼料用作物などに転換して地域内で生産から加工、消費までを一貫して行う構想である。

## 山形大学を中心とした実証

庄内平野南部の歴史と自然風土あふれる鶴岡市で、山形大学農学部を中心に、地域の風土を生かしながら、地域内循環型システムの構築を目指す庄内スマート・テロワール構想の実現に向けた様々な研究が行われている。

山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センターの浦川修司教授によると、山形大学におけるスマート・テロワールへの取組みは、松尾氏が唱えた理念の実証として、2016年からスタートした。

スマート・テロワールは生産から加工、流通、消費までの全工程に地域内の事業者が関わり、地域内で循環する経済圏ができることで、地域全体が盛り上がり食料の安全保障の面にも大きく影響を与える。これまでに商品化した製品は多岐にわたり、消費者から評価されている。

今後の展望について、「今年はプロジェクトを始めて6年目。ワインナード、ハム、ベーコン、みそ、小麦製品（麺やパン）など少しずつ商品が認知されてきた。これからも研究部門として関わり、将来的には地域に根付かせ、地域の自主的な活動にもっていききたい。日本各地で独自のテロワールが構築されて行くことが理想である。」と話してくれた。

# 山形大学農学部 高坂農場での取り組み

スマート・テロワール構想の実現に向け、中心となって取り組みを進めている山形大学農学部。畜産分野の研究に励む4年生6名は、栽培・保管技術・肥育・品質などの研究をとおして、全員がスマート・テロワールに関わっている。



<質問> ①研究内容は？ ②大変なこと、やりがいを感じることは？ ③今後の抱負と目標は？

## 相馬奈央さん

- ①庄内産のとうもろこしを豚に与え、**エサの種類が肉質にどんな影響を与えるのか**を研究しています。
- ②現在 **18頭の豚を肥育**しているので、**毎日のお世話が一番大変**です。  
エサの残し具合を見て「体調が悪いのかな」と気づけるようになったことにやりがいを感じます。
- ③庄内産飼料が肉質に与える影響がわかればいいなと思っています。  
また、**庄内産の飼料が広く普及**していって嬉しそうです。



## 浅沼美歩さん

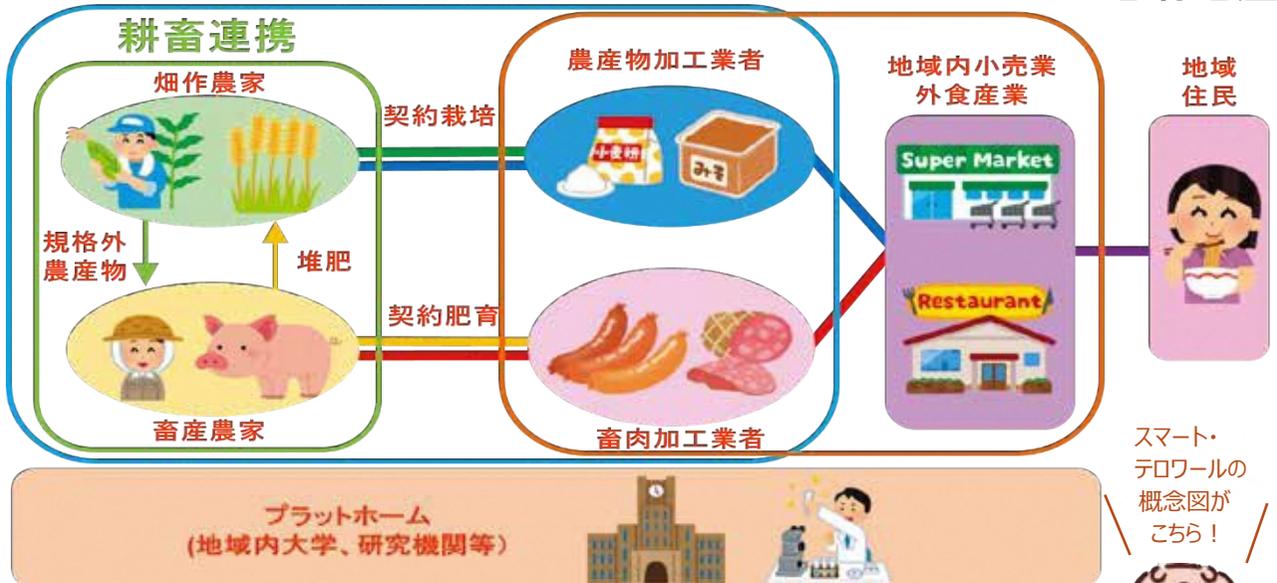
- ①飼料用子実とうもろこしの**乾燥、保管、品質管理**について研究しています。
- ②日本には飼料用子実とうもろこしの乾燥・保管に関する研究事例がほとんどありません。  
特に、保管の面については参考データも少ないため**手探り状態**です。
- ③日本で飼料用子実とうもろこしを保管する際の**参考となるような成果**が得られたら嬉しそうです。  
また、**品質が保てて、効率のいい、安価な保管方法**が見つければいいなと思います。



## 農工連携

## 工商連携

## 地消地産



スマート・テロワールは、「**耕畜連携**」「**農工連携**」「**工商連携**」「**地消地産**」の4つから構成され、全工程に**地域内の事業者**がかかわり、**地域内で循環**する経済圏ができること。

スマート・テロワールの概念図がこちら！



《取材先》 山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センター 高坂農場  
〒997-0369 山形県鶴岡市高坂字古町5-3 ☎ 0235-24-2278